



乙女♥新撰組

みかづき紅月

illustration ©YUKIRIN

美少女文庫
FRANCE & SHOIN



新撰組局長は女の子!?

京の都の治安を守る新撰組――

その隊士たちは、類い希なる剣の腕前をもって、悪人に天誅を下す劍客集団である。だんだら模様あざまじに浅葱色の羽織の背に誠という文字が白く染め抜かれたいでたちは、衆目の知るところ。

ただし、この物語は、そんな史実に残る新撰組とはまるで異なるもう一つの新撰組の物語である。

夜目にも鮮やかな赤毛の髪を無造作にポニーテールに結びあげた少女は、意志が強い。そんな瞳をぎらつかせて、山の稜線ぎりぎりに重たげにかかる紅い月を見あげていた。その手には一振りの刀が握られている。

視線を移した彼女のまなざしの先には四人の子供たちがいた。

無邪気な笑い声をあげて、遊びに夢中になっているようだ。

「かーごめ、かごめ。かあーごのなーかの鳥いはー、いーついーつでやあるうー」
風の音一つなく静謐せいひつに沈む真夜中の京の都に物悲しいメロデーが響く。

一見、ごくごく普通の光景にも見える。ただし、それが昼か夕暮れ時であるならば今の時分は草木も眠る丑三うしみつ時——こんな真夜中に子供たちが遊んでいるという光景は奇妙であるということを通り過ぎて、不気味さすら感じる。

「よーあけーのばあんに。つーるとかーめがすーべったー。後ろの正面だあれ」
尋常ならぬ気配が色濃く漂っている。

だが、怯ひるむことなく少女は、一心不乱に遊ぶ子供たちに近づいてゆく。

「おねえちゃん。いっしょにあそぶ？」

子供たちは顔をあげると、人懐っこい丸い目をくりくりさせて彼女を遊びに誘う。と、一瞬、少女の顔が曇る。

だが、すぐにまた彼女は表情を凍らせると、腰に提さげた刀をすらりと抜いた。淡い光に覆われた刃が闇に浮かびあがる。

「ここはおまえたちの居るべき場所ではない」

そう言うと、彼女は刀の切っ先で空中に碁盤目の紋様を描きつつ鋭い声で唱えた。

「臨、兵、闔、者、皆、陣、裂、在、前っ！」

唱え終わつた瞬間、刀が灰白く光り輝く。

次の瞬間、彼女は迷うことなく、次から次へと子供たちを袈裟懸けに斬りつけにかつた。

それは、まさにほんの一瞬の出来事だった。

斜めに闇を裂きつづける閃光が走り、また静寂があたりを支配する。

信じられないといったふうに見開いた子供の喉が、悲しそうにひゅうつと音をたてると、その小さな体軀がその場に倒れた。

そして、その体を成していた輪郭が闇に崩れゆく。

子供たちは砂塵となり、一陣の風がそれを闇のなかへと散らしていった。

「——悪霊退散、天誅、完了」

少女はそう言うのと、そつと瞳を閉じた。

まだあどけなさを残したその横顔には苦悶の色が滲んでいた。

だが、すぐにまた彼女は何事もなかったかのように目を開けると、刀を右に一払いして手首をかえし、鮮やかな手つきで鞘へと刀身を収めた。

鏗がチンっという軽い音をたてて、静けさのなか、響き渡る。

彼女が羽織っているんだんだら模様の浅葱色のぶっさき羽織が風にはためく。

その背には、誠という一文字が白く浮きあがって見え、その裾と袖には、白い山形が染め抜いてある。

彼女は目を閉じると、踵きびすをかえして、夜の闇のなかへと消えていった。犬の長い遠吠えが、紺碧の夜空へと吸いこまれていった。

「うはあ、やっぱり都会って、めっちゃ人があるんだな。しかも可愛い子めっちゃ多いし。ほら、あれだ。京美人……。うひょーたまんねえ」

「まあ、京は都会だしな。都会には人も物も集まるってのが道理だ。用心しないとな。ちゃんと金は風呂敷に包んで腹に巻いとかないと。盗まれたらいけないから」

「って、肇はじめ、おまえ、なにブルってんだよ！」

「べ、べべ、別に……。ブルってなんかないぞ」

「どこのツンデレだよ」

夜になると、色とりどりの灯籠とうろうに灯がともし華やかさが増す京の祇園ぎおん、花見小路はなみこうじを物珍しげに見まわす、いかにもおのほりな二人組がいた。どこかの田舎から出てきたばかりといった風情だ。

一人は、着崩した着物に好奇心旺盛な瞳を光らせている長身の青年で、不真面目で快活な伊達男だておとこといった風貌をしており、対するもう一人の中肉中背の青年は、その太

い眉毛といい、真一文字に引き結ばれた口もとといい、真面目という字をそのまま人にしたらこんなふうになるだろうと思しき青年だった。

「な、肇。俸禄が出たら、絶対にここに来ようぜ。俺、あの娘がいいなあ。ほら、見てみるよ。絶対、今、俺見たって。ほら、あの娘。胸超大きくねえ？」

「まだ気が早いっての」

「いやあ、あれさ、絶対にFはあると思うんだよなあ。うは、あの娘もいいな。Eと見た。おっぱいいいよな。おっぱいいっぱい」

花街を艶やかに彩る遊女たちに目移りし放題の肇の悪友、善雄は、胸もとをほだけた遊女たちのおっぱいに夢中で肇の言葉なんて聞いちゃいない。

「本当におまえは。そんなに優しい放題じゃ、入隊試験にも通らないぞ」

「大丈夫だつての。俺とおまえは村で一、二を競う腕前だしな！」

「村でならな。だが、ここは都だつてことを忘れるな。さまざまな村から猛者が集まっているに違いない」

「つたく、おまえは本当に気が小せえつてか、心配症だよなあ。そんなだと女にモテねえぞ？」

「……おまえみたいな軽薄な男に騙されるような尻軽女に興味はない」

「とりあえず、俺はおっぱいが大きいことがなによりも優先事項だ」

「つとにおっぱい星人だな、おまえは」

「しゃらくせえ。おっぱいには男の浪漫ロマンがごまんとつまってんだよう！」

「おい、こら。あんまよそ見しながら歩くなつてば、危ないだろ」

そう肇が言ったその時だった。

善雄が派手になにかにぶつかつてよろめいた。

顔をあげると、そこに人相の悪い男がいた。そのいかにもわかりやすい悪人面の浪人に睨まれて、二人は硬直してしまふ。

「おめえら、どこに目えつけてんだよ！ 死にてえのか！」

「うおあつ、い、いや、わざとじゃ……」

「大体、どこの田舎モンだよ、てめえら。そんな汚いなりして花街をうろつくんじゃねえよ。てめえらみたいなのが俺が肅清してやる。流行の新撰組っぽくなあ？」

いきなり男がにやりと笑うと、腰の刀に手を運んだ。

「え、ちよ、ちよっ!? そんなぶつかつただけで……。わざとじゃ……」

「つたく都モンは短気やなあ。ゆとりつちゆうモンが欠けてるんじゃねえの？」

肇は、なんとか平和的に解決できないかとあわてふためき言葉を探す一方で、善雄は好戦的に刀の柄へと手を運ぶ。

人通りの多い往来というのに、誰もが無関心を装って浪人に絡まれた肇たちになん

て見向きもしない。

(こんなことが日常茶飯事ってのか!?)

肇は、周囲を見まわしながら心のなかで毒づいた。都が物騒だということは聞いていたが、早速現実を思い知らされショックを受けてしまう。

と、そうこうしている間に、善雄と浪人は刀を引き抜き、怒号をあげて太刀筋を結んでいた。刀と刀とが灯籠の灯りを反射し、煌きながら交錯して、断続的に火花を散らす。

だが、その時だった。

「——やめえっ！ 花街で無粋なことをするでないっ！」

不意に、勇ましい少女の声がした。

はっと振りかえると、雨が降っているわけでもないのに、番傘を差した少女が不敵な笑みを浮かべてそこに立っていた。顔は傘に隠れて見えない。かろうじて口もとのみが見える。彼女は、丈の短い紫色の着物をまとっていた。ややむっちりとした肉感的な太腿もあらわで、肇は視線をせわしなく彷徨わせてしまう。

その着物の上に浅葱色の羽織を背負っているといった、侍としては珍しいいでたちだった。

だが、誇らしげに張られた胸のふくらみはたっぷりとせりだしており、その形に合

わけて着物に皺が寄っている。着物の合わせ目からは、深い谷間が無防備にのぞいていた。

（女の子、だよな？　なんで男装なんかして——）

肇は突如現われた謎の少女を怪訝に見つめつつ、男の動きを警戒する。まさか女子供に大の大人の男が暴力を振るうとは考えられないが、なにせここは都なのだ。自分の常識が必ずしも通用するとは思えない。

「なんだあ、おまえは。男同士のやり合いに女風情が口挟むんじゃねえよ。まあ、やらせるつつーなら話は別だがよ」

男は、すごみながら下卑た笑いを浮かべて少女へと近づいた。

だが、少女は逃げだすどころか微動だにしない。

「はっ、クズがっ！」

次の瞬間、そう鋭く叫ぶと、少女は傘を男へと放り投げた。

視界を妨げられ、男は舌打ちすると刀を斜め上へと一閃させ、傘を斬り捨てた。

しかし、次の瞬間、その場に硬直してしまふ。

「う、つぐぐ……」

喉もとに研ぎ澄まされた刀の切っ先が突きつけられていた。

傘の柄に仕込まれていた刀を少女が一瞬の内に引き抜き、男の喉に突きつけていた

のだ。その尋常ならざるスピードに周囲は息を呑む。

が、少女の顔を見て納得した。

つぶらな瞳に小柄な身体、どこからどう見ても愛くるしい少女だが、その瞳は怖いくらい凍てついている。京の都の者なら誰でもよく見知った少女だった。周囲は彼女の姿を見た途端、体をすくめてそそくさとその場を立ち去ってゆく。あの傘は、自分の顔を隠すためのものだったのだと知る。誰もが彼女には深く関わり合いたくはないといった素振りをあからさまに見せていた。

「お、おまえは……」

無論、男も少女の正体には気がついていた。大げさなほど、体が震えている。

だが、田舎から出てきたばかりの肇たちは、状況がよくわかっておらず、ただひたすら美しい少女とその剣の腕前に見惚れていた。

「死にたくなくば、去ねっ！ 花街だけは血で汚したくはない」

少女が鋭い声で言い放つと、刀を真横へと振り払った。その動きに合わせて、柔らかそうな胸がふるりと震える。

「ひ、ひ、ひいいいいいい」

男はほうほうの体で逃げだし、人ごみへとまぎれていく。その姿を半目で見送った少女は満足げにうなずいてから、仕込み刀を傘の柄へと仕舞う。

つんと突きでた形のよい大きな胸が、やはりふるふると揺れ動く様に、善雄は完膚かんぷなきままで釘づけになっていた。

「まったく……。休みの日くらい、のんびりしたいものだが。こういうのを職業病というのか。こういう中途半端なことをしては、カレンにまた叱られてしまうな」

無駄一つない鮮やかな刀の扱いを見て、肇の心臓が早くも高鳴りつつあった。

(す、す、すごい……。この娘、ただものじゃない……)

村で見たどんな侍の剣の腕前をも凌ぐ動きは、尋常ならざるものだった。

剣の道一本を歩んできた肇は、先ほどの動きだけで彼女が途方もない力の持ち主であることを肌で感じ取ってとてつもなく感動していた。

(俺と年もそう変わらないように見えるのに。しかも女の子なのに、すごすぎるっ)

「あ、あのっ、ありがとうございます」

上ずった声で言い、少女へと勢いよく頭をさげる。

すると、彼女はだるそうにポニーテールを後ろへと払って、こう言つてのけた。

「別に、おまえたちを助けるためではない。ただ、華やかな女たちの街を汚したくないだけだ」

「つかぬことをお尋ね申すが、どこの道場に通つておられるのか。本当にすごい。一度手合わせ願いたい！」